



新しい出会いのとき

吉岡 晶子

四月、さくら便りとともに、気持ちがわくわくして新しくなる季節。一年に一回春は必ずやってきて、毎年、毎回気持ちをリフレッシュしてくれませう。新年度、新学期、入園式と、新たな人との出会いが気持ちを前向きにして生き生きとさせてくれる季節、私にとって大事な大好きなときです。

入園式。これから一緒に生活する子どもたちとのご対面。これまでに何度も経験しているのに、何回繰り返しても毎回どきどきします。初めて会う私をどう思うかしら、受け入れてくれるかしら、笑顔で迎えよう、など不安と緊張は私も子どもたちも同じです。

これまでには、いろいろな出会い方がありました。「おはよう〇〇ちゃん」と言ってもプイと横を向いてしまったA子ちゃん。私の腕の中でしくしく泣き続けたBくん。一生懸命練習してきたのでしょうか、「わたしは〇〇です」と立派な挨拶をしたC子ちゃん。人数を数えるとな人多いのでおかしいなと思っていたら、隣の組からのお客様がいたりしたこともありました。みんな初めてのところに来て精一杯の自分の思いを表しています。それはわたしも同じ気持ち。みんな新しく、新しい生活へのスタートの日、記念すべき一日が始まります。

本園の入園式の日、年少児は五十メートルもありそうな長い廊下を、歩いて遊戯室へ向かうという難関イベントから始まります。なにしろ年少児

の保育室は玄関のすぐ近くにあるのですが、遊戯室は、長い廊下のはじつこにあるのですから。西も東もわからず、今自分が何でどこにいるのかもよくわからないのに、初めてあつた人（先生）にどこかに連れていかれる……。さぞかし不安なことでしょう。ここに、頼もしい助っ人が現れます。年長になりたての年長児の選抜メンバー（と言っても希望者ですが）が、エスコートしに迎えに来てくれます。

年少児一人に年長児一人が手をつなぎ、偶然出会った二十ペアが並びます。もちろん中には泣いて母親から離れない子もいますし、並んではいても手はつながらない子もいます。それはそれで認めてあげましょう。両手を年長さんにつないでもらって「もうなにもできない、どこへも行けない」という状況になる子もいます。担任としては有難



いことでもあります。

年長になって二日目の年長児も、使命感と緊張感がないまぜの表情。“みんながすぐるように先頭にいる担任を見つめている”と、担任は思っています。笑顔は絶やさずにいます。

遊戯室にたどりつき、座席に案内して役目が終わると、年長児はホッとして緊張がほぐれ、いつもの笑顔にもどり、リラックスした表情。半月前までは年中児だったのにやけに大人びて見える時です。

不安な時、何かを持つたり、誰かに寄りかかったり、手を握ったりと拠りどころが欲しいものです。そんな時に自分の手をしっかり握ってくれる人がいるということはなんて心強いことでしょう。年少児にとっては、知らない人であっても、自分より少しだけ大きい年長さんが自分の気持ち

に近いと思えるのでしょうか、無理のない自然な支えになるようです。この日の体験は、年長児にとっては、これからの生活は小さい不安そうなる年少児も一緒になって繰り広げられていくであろうことを実感させてくれ、その後の意識にもつながるようです。

数年前までは、このようなかたちを取らず、新入の子どもたちと担任とでがんばって遊戯室へ行きました。今のような取り組み方になってからの方が、年長児が年中児や年少児へ思いを馳せることや、遊びのなかでの出会いやかかわり合いが自然に見られるようになったように思います。

入園式が始まりの日ですが、もうすでに何日も前から“新しい出会い”に向けて入園の準備は始まっています。お部屋の準備。どういう配置にし

よやかな、本箱の向きは……、積み木はどこに……、ままごとは……、絵本は何がいいかななどと環境を整えながらだんだん気持ちは新入園児の姿を思い浮かべるようになります。これらの準備にはその園らしさ、大事にしていることがあるのではないのでしょうか。本園らしさは何なのか考えてみました。

ひとつは「なまえ」に関することになるでしょう。入園式を迎えるまでには、一人の子の名前を何回書くでしょうか。名簿作り、靴箱、コート掛け、タオル掛け、引き出し、外靴入れ、着替え入れと、一人ひとりが何か所か自分の場所をもつこととなります。この数は結構多い方でしょう。古い園舎の構造上作りつけの棚がないので、家具を置いて個人の場所を決めることとなります。いろ

いろなところにもものを置くこととなりますが、今の条件のなかで、なんとかわかりやすく……と思いつながら準備をすすめます。その名札を、本園では年少児から年長児まで全員がシールやマークではなくひらがなのフルネームで書きます。きっと家で書いているのと同じでしょう。本人は読めなくても、大勢いるなかのひとりの人間としての存在の象徴、といったら大げさかもしれませんが、目印ではなく、ひとりの存在をしつかり受け止めていますよ、保障していますよ、あなたの存在の証ですよ、という思いの現れです。特に年少児に





とつてはなんだか読めないわからないものでしょう。でもすぐにわからなくても、場所、位置としてだんだん感覚的に認識していくでしょうし、先生と一緒に「ここがあなたのところよ」と探したり見つけたりすることが教師とのつながり、信頼関係を築いていくことになるのではないのでしょうか。だんだんにわかっていくことは、自分の世界を広げて安定していくことになると思っています。

名前を何回も繰り返し書いていくなかで「この子は大きいのかしら……」「面白い名前……」「願いが伝わる名前なこと……」など、名前から勝手にイメージを膨らませたりしているうちに、だんだん一人ひとりが身近になり、まだ会っていないのを知っているような気がしてきます。きっと家ではおかあさんやおとうさんが、ハンカチ・靴・靴下・靴袋・かばんなどなど、いろいろなものに

名前を書いていることでしょうか。同時進行で幼稚園では私が……。みんなでひとりの子の新生活を支えようとしています。その気持ちは同じかもしれません。違うのは、こちらは一度に大勢と向き合うということでしょうか。

もうひとつ、胸につける「名札」がありません。参観の方に「名札はないのですか？」と、よく聞かれます。本園には子どもにも先生にも名札はありません。では、どうやって名前を覚えていくのでしょうか。私たちは一人ひとりの子どもたちとかわかること、話をしたり触れ合ったりするなかでだんだんに覚えていきます。一緒にくをした○○ちゃん。あのと泣いていた○○くん。○○が好きな○○ちゃん。○○だった○○ちゃん。などというようにエピソードを通して知

り合いになり、名前・クラスを覚えていきます。その時の手がかりになるのは靴に書いてある名前ですが、その人の“人となり”が名前を伴ってくるという気がします。名前を覚えるには多少時間がかかりますが、名前を知っているというだけでなく、”そういう名前をもつひとりの人”と“わたし”が知り合っていくことだと考えています。もともと子どもたち同士はこのようにして名前と顔を一致させているのではないのでしょうか。大人も同じ感覚で関係作りをしているということでしょう。

保護者の方も、はじめは名札がないことで、「名前がわからないから声を掛けにくいです」という声もありましたが、逆に「お名前はなんていうの？」と話しかけたり「おはよう」と声をかけたり、子ども同士が呼び合っているのに耳を傾け

たりして、かえってかわらうとするようになるようです。

“なまえ”について思い巡らすことで、基本姿勢を考えさせられました。どの園にも何かしらこだわっていることがあるでしょう。そこに、園の考え方、ポリシーがあり、それは保育に反映すると思います。年度始めに、いつもしていることを、自分たちはなぜこうしているのかあらためて考え直すことは保育に対する姿勢を確認するよい機会。新年度を迎えるにあたって、持ち物、遊具、用具の出し方なども見直し再確認してみたいと思います。

物事の始まり、出会い方の意味深さ、大切さをあらためて考えさせられました。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)